

氏 名 : 小 野 麻由子
学 位 の 種 類 : 博士 (健康科学)
学 位 記 番 号 : 研博第 38 号
学位記授与年月日 : 平成 29 年 3 月 9 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条 1 号該当
論 文 題 目 : 地域包括ケアシステムにおける看護職の在宅シフト型コンピテンシー
尺度開発の試み
論 文 審 査 委 員 : 主査 上 泉 和 子
副査 出 雲 祐 二
副査 夏 原 和 美

論 文 内 容 の 要 旨

I. はじめに

2014年の診療報酬改定基本方針では、地域包括ケア病棟が新設され、地域包括ケアシステム構築において在宅シフトを支援するパイオニアとしての役割が期待されている。地域包括ケア病棟の看護師は退院調整という新たなサービスの視点が必要となり、患者の在宅生活への移行に向けたきれめのない支援として在宅シフトに関する看護実践能力を身につける必要がある。また、患者や家族は従来からの医療やサービスを受けるといった受け身の姿勢から、自らがセルフケア能力を向上させ、住み慣れた地域で生活を継続できるよう自立する考え方が不可欠となる。

以上のことから、地域包括ケアシステムにおいて、患者や家族が病院から在宅に満足してシフトすることの実現には、患者と家族のセルフケア能力の向上に向けた関わりを含め、在宅シフトに卓越した看護実践能力が期待されると言える。つまり、患者や家族がそれぞれに持つセルフケア能力を最大限に発揮し、在宅復帰が実現するよう、在宅シフトを支援する看護職の行動特性並びにその卓越性としてのコンピテンシー尺度を構築することが急務である。

本研究は地域包括ケアシステムにおける看護職の在宅シフト型コンピテンシーを明らかにし、その尺度の開発、並びに信頼性・妥当性の検証を目的とする。

II. 研究方法と対象

用語の定義: 「在宅シフト型コンピテンシー」とは、在宅への移行に向けたきれめのない支援において、卓越した実績及び業績をあげる能力を行動特性に置き換えて表現したものである。

1. 第1段階: 尺度項目案作成では、地域包括ケア病棟の看護管理者、ハイパーフォーマー看護師、患者・家族、介護支援専門員、地域包括ケアに精通した学識者、合計16名を対象として、インタビュー調査を実

施した。インタビューデータは、質的記述的方法を用いて類似性ごとにカテゴリー化し、文献レビュー等の結果と合わせ、概念と質問項目の原案を作成した。

2. 第2段階：内容妥当性の確保のために、インタビューを実施した病院の看護部長、ハイパフォーマー看護師、この研究分野に精通した実践家及び学識者、合計10名の専門家をエキスパートパネルとし、質問項目とそれが該当する概念との関係の妥当性、質問項目の適切さを検討してもらった。次に、パイロットスタディでは第1段階の調査対象施設と、今回、承諾の得られた病院の看護師、合計106名を対象とし、回答にかかった時間、答えにくい質問項目等の回答を得て、概念と質問項目を再構成した。

3. 第3段階：項目分析、信頼性・妥当性の検証は、64病院の地域包括ケア病棟及び地域包括ケア病床で勤務する看護職1,348名を対象とした。項目分析では、反応分布、天井・床効果を確認し、G-P分析、I-T相関分析を実施した。信頼性テストでは、1) 再現性、2) 内的整合性、妥当性テストでは、1) 内容妥当性、2) 基準関連妥当性、3) 構成概念妥当性を検証した。

本研究は、青森県立保健大学研究倫理審査委員会の承認を得た上で開始した(承認番号 1539)。

III. 結果

インタビューと文献レビューの結果から、質問紙原案を5概念57項目で作成した。また、エキスパートパネルの回答数は10件(回収率100%)、その後のパイロットスタディでは、回答数は73(回収率68.9%)で、有効回答は71(67.0%)であり、最終的に質問紙は6概念56項目となった。

項目分析、信頼性・妥当性の検証では、回収数は682(50.6%)、質問項目56項目全てに欠損のなかったものを有効回答とし、614(45.5%)を分析対象とした。項目分析の結果、天井効果・床効果を示す値はなく、I-T相関は、0.459から0.799の範囲であり、G-P分析でも高得点群が低得点群よりも得点が高かったため削除項目はなかった。その後、56項目で探索的因子分析(最小二乗法、プロマックス回転)を行った。質問項目の取舍選択は、共通性が0.2以下の項目、因子負荷量が0.4未満及び、所属因子以外への因子負荷量が0.35を超える項目を基準として、それらの項目を除いた。

その結果、「地域包括ケアシステムにおける看護師の在宅シフト型コンピテンシー尺度」は、第1因子【在宅に向けた環境の最適化】、第2因子【患者・家族の価値観を尊重した専門的アセスメントと実践】、第3因子【病院と地域をつなぐ患者・家族を主軸とした連携】、第4因子【多職種と協働するプロセス評価】の4因子40項目で生成された。

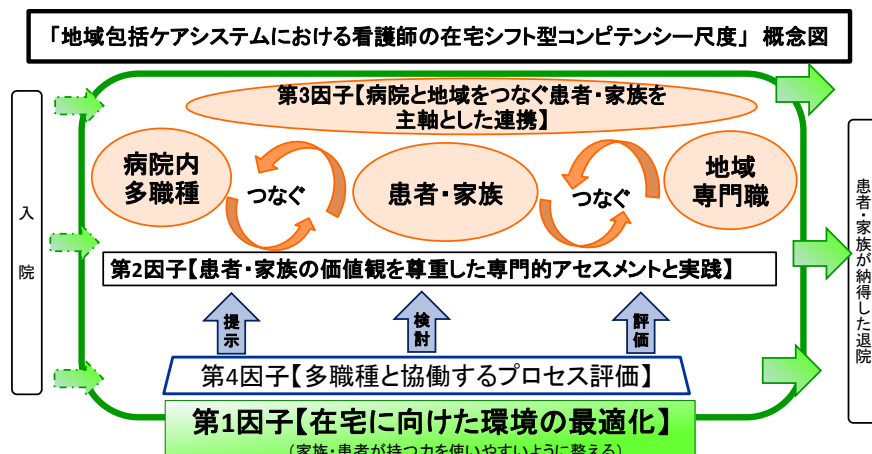
1) 信頼性：各因子のCronbachの α 係数は0.805~0.932、再テスト法での相関は、 $r=0.643$ であり、内的整合性や安定性が認められた。

2) 妥当性：エキスパートパネルやパイロットスタディで表現方法の修正等を実施し、内容の妥当性を確認した。「退院支援看護師の個別支援における職務行動遂行能力評価尺度」との相関は $r=0.766$ と併存妥当性が確認できた。また、因子分析から抽出された因子と質問紙原案の構成概念との一致状況や各因子の構造から、構成概念の妥当性も確認できた。

IV. 考察

下記の図は、「地域包括ケアシステムにおける看護師の在宅シフト型コンピテンシー尺度」の4つの因子

を包含して、患者・家族が納得した退院をむかえられるよう支援する看護職のコンピテンシーを概念化したものである。



「地域包括ケアシステムにおける看護師の在宅シフト型コンピテンシー尺度」の特徴は、第1因子【在宅に向けた環境の最適化】が抽出されたことである。この因子は、患者・家族の持つ力を使いやすいような状況に整えるために最適化を図るという内容であった。

今後、地域包括ケアシステムの構築に伴い、在宅シフトが進められていく中で、「地域包括ケアシステムにおける看護師の在宅シフト型コンピテンシー尺度」の項目は、看護職にとって必須のコンピテンシーになると言えよう。

V. 結論

「地域包括ケアシステムにおける看護師の在宅シフト型コンピテンシー尺度」は、4因子40項目から構成され、信頼性、妥当性が確認された。

論文審査結果の要旨

本学位論文は、地域包括ケアシステムの構築においてパイオニアとしての役割が期待される看護職の在宅シフトを支援するコンピテンシーを明らかにし、測定尺度を開発するとともに、質問紙の信頼性、妥当性を検証する研究である。

本調査は3つの段階で構成され、患者／家族ならびに医療関係者へのインタビューの内容分析に基づき、看護職の在宅シフト型コンピテンシーの5つの概念と57のアイテムから構成される測定尺度を開発し、第2段階のパイロットスタディーにおける因子分析により6概念56アイテムとした。

第3段階の本調査で、信頼性・妥当性テストの方法に従い分析した結果、信頼性・妥当性が確認された。また探索的因子分析等の結果から、在宅シフト型コンピテンシーは4因子と40アイテムによる尺度として精練した。

本論文は、緻密な計画に基づき質問紙開発と信頼性・妥当性の検証が行われ、信頼性・妥当性が確認された。本結果は今後増大するであろう「移行」を支える看護を探求するうえで貴重な尺度となり、さらにこの尺度を用いた研究を進めることで質向上に資する資料を提供することができると思われ、看護への貢献が期待される。

以上の点から博士（健康科学）の学位授与に値すると判断する。